



毒ガス研究から出た肥料

三本ノルで食糧を増産したい

医学博士

高倉 潤景

破滅を避ける方策はある

「一九九九年七月人類が全滅するような大事件が起こるといふ『ノストラダムスの大予言』が百三十万部売れた。公害で世界は滅びる、エネルギー危機だ、食糧危機だと予言や超能力者のあいつぐ発言で、人心は大きく動揺しています。有名な文化人や学者までが発表する内容はおよそ悲観的な材料ばかり。なぜもう少し前向きの方策が出てこないのか。今いうべきことは悲観論ではなく、積極的な前向きなアプローチです。

私は無数の悲観論者たちに、絶叫したい思いにかられています。「対策はあるんだ」と、**「反農業公害」**を

旗印に二十七年、終戦後一貫して農業公害の恐ろしさを訴え、公害に勝つ方法を研究してきた**「公害博士」高倉潤景**(ひろかげ) 医博の悲痛な叫び……。

昭和十一年四月、二十三歳の陸軍軍医少尉高倉潤景は、陸軍習志野騎兵隊に入隊。だが、馬を乗りまわす軍医としてはなく、命ぜられたのは陸軍病院付きの化学兵器研究員の勤務。騎兵戦及戦車戦

する。ここで堀口少将から「これからの近代戦には原子力兵器も出てくる。放射能の研究もしろ」とすめられ、当時の最新の学問をひとりコツコツと研究する。佐藤武雄京城帝国大学医学部長(後の信州大学学長)のアドバイスを受

『国際医農学会』を自ら設立

だが不幸にして、中佐という立場だったために「追放」され、やっと追放解除になったのは昭和二十八年十二月二十八日。信州大学などから迎えに来たが、その時はもう水戸の郊外で神経外科「高倉医院」を開業していたし、農薬公害追放の信念に燃えていたのであった。高倉氏は農民の中へ入っていった。

それから再び独学をはじめた。これが医学と農業のドッキングをはかった『医農学』である。健康な作物を食べてこそ健康な身体が維持できる、というのだ。公害作物を食べていては身体も精神もむしばまれてしまう。

高倉氏は農民を会員として、自ら会長となり「国際医農学会」の設立を宣言した。いま、農民を中心として学者、農業技術者など、国際医農学会の会員は十万人に達している。

やがてDDTが効かなくなったので、BHCが登場した。DDT

けながらの独学である。だが高倉氏は勉強すればするほど、「みな殺し戦争をしてはいけない」という反戦気分が起ころのだった。『毒変じて薬となす』という高倉氏のモットーは、すでにこのころからのものである。

と同じ有機塩素系の農薬である。はたせるかな、典型的な患者が来はじめた。かつての化学兵器研究時代の有機塩素類の恐ろしさを思い出し、この残留毒性の行方を追うことにした。

高倉氏は医院を開業しながら精力的に研究を続けた。最新情報を仕入れるために、医師会には必ず出席した。

そのころ、医者ももうかりはじめて、みんなオートバイに乗ってきた。が高倉氏は錆びたボロ自動車に軍隊靴姿。他の医者が車に乗っても、相変わらずボロ自動車。医師会に出た。収入のほとんどを研究費につき込んでいたからだ。貧乏だったのは高倉氏だけではない。妻も子供も一家じゅう、父親の研究のため、貧困に耐えていた。妻の乃信(しのぶ)さんはモンペで押し通し、化粧品一つ買わなかった。長女の敦子さんもお古の生地で作った服で幼稚園へ通った。

だが、医者仲間は「医者が百姓のことを研究して何になるんだ」と笑って、無視した。専門分野以外の研究——農業はもちろん、栄養学、天体、地質、

鉱物、海洋、古生物学、植物——。大学の研究室にも盛んに出入りした。

こうしてやっとなつかんだのがミネラル(微量要素)だった。窒素リン、カリだけで植物は育っていない。高倉氏は現在の土壌にないミネラルをビックアップした。土壌にないが海水に含まれているミネラルなどである。マンガン、ナトリウム、マグネシウム、カルシウムなど。ミネラルを加えた試材(肥料)をつくって作物に与えた。はたして、作物のときはよかった。

さっそく農民の協力者を求めた。しかし農薬と三要素肥料でそれなりの成績を上げている農民はいい顔をしない。海のものとも山のものともわからないものを、となかなか使おうとしない。高倉氏はあきらめなかった。お酒の一升びん(一・八リットル)を下げて夜、農家を訪ねる。

理解者は徐々に出てきた。一度使ってくればしめたものであった。確実に収穫の成績はよかつた。

あるとき「良い肥料だから製造させてくれ」と某肥料会社が出た。快く「どうぞ」といった。が結果はデタラメな製品をつくられ、信用を傷つけられた。憤然として製造を中止させた。

その後、何回もいるんな肥料会社からの製造許可の申込みがあった。だが、高倉氏はもう首を縦には振らなかった。

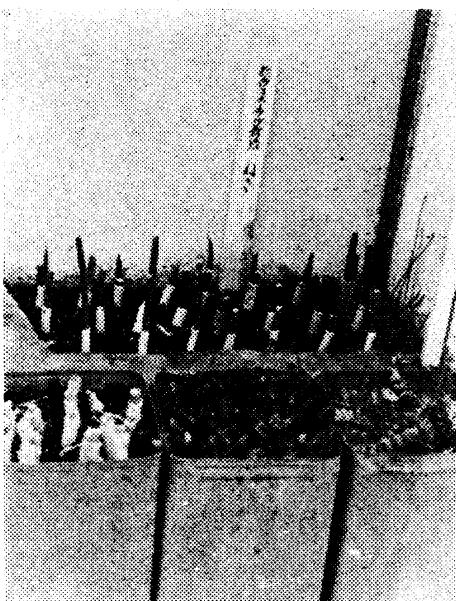
た。どんどん改良していった。新しいミネラルを加えたり、量を増やしたり減らしたり。こうして完成したのがミネヒロンであり、ネオヒロン、ハイヒロンらのミネラル肥料である。

だがこの間、研究試材として会員に実験してもらっていた試材が、肥料法違反に問われたり、高倉家は多事多難であった。

従来肥料や農薬がけなされれば、県の役人にとっても、農薬、肥料メーカーにとっても、高倉氏は煙たい存在になったのは当然である。農業普及員にとっては、従来の自分の知識の信用を傷つけられる。

その後、何回もいるんな肥料会社からの製造許可の申込みがあった。だが、高倉氏はもう首を縦には振らなかった。

く、大きく、栄養豊富な作物が収穫できた。米にはじまってきゅうり、なす、とまと、いちご、ほうれん草など、あらゆる作物で実験された。現在も全国の弟子たちが



総合ミネラルを使うと 野菜の生長力がぐんと強くなる (写真はネギ)

ミネラル肥料の驚異的成果

本ものの強さで、ミネラル資材を使った肥料は順調に育っていった。『毎日ライフ』(48年7月号)にもすでに紹介されたが、ミネラルを使用しない作物に比べて、早

実験結果、豊作の具合を報告してくる。

ほうれん草は束ねやすく、出荷の手間が大幅にはぶけた。いちごもねぎも巨大に育ち、しかも甘くおいしかった。運搬に際してもいたみが少ない。商店ではもちがよいと評判になった。フロリダからも「収穫したいいちごのもちがよい」と報告してきた。

高倉試材をもとにしたミネラル肥料は、アメリカ、カナダ、メキシコ、ブラジル、アルゼンチン、インドネシア、マレーシア、トルコ、エチオピア、スリランカ、韓国に輸出されている。むろん、国際医農学会会員、弟子たちもこれらの各国に散らばっている。弟子たちと呼ばれたりして米國へ五回、メキシコに二回、講義と講演、実際の栽培法などを教えてまわった。

高倉氏は中国本土にも渡る準備をしている。

アメリカの弟子は、光合成を試験管の中で成功させた学者として知られるカリフォルニア大学植物細胞研究所長ダニエル・アーノン教授(理博)を紹介してくれた。アーノン教授から会いたいと申し入れてきた。昭和四十一年、高倉氏はアーノン教授に会った。アーノン教授は、ミネラルを加えることによって作物の生育がよくなることを実験発表(昭和三十年)した

が、「高倉氏がすでに五年も前から実用化しているのは大したものだ」とたたえた。

高倉氏はさらに新しい実験を続けている。作物に総合ミネラルを与えた後、さらに、ハウスの中に炭酸ガスを吹き込むことで、いちだんと作物の増収をはかるわけである。ミネラルの実験は植物だけでなく、動物でも成功した。さらに人体でも成功した。

最初、人体実験を受けたのは、妻の乃信さんである。結核で衰弱していた時、ミネラルを与えて体力を盛り返し、長男が生まれた。丈夫に育ち、いま大学の受験勉強に追われているが、スポーツマンで、その手足は鋼鉄のようである。母体にも与えられ身心とも安定した赤ん坊が生まれるという。高倉氏は多くの母親や父親から感謝されている。

大学の講義、講演、研究、そして中国語の勉強に、高倉氏の一日は忙しい。しかし、町医者としての診察は、昭和二十二年から同じように続けている。いまでは口コミで北海道、東北、関東、関西、九州からも医者に見放された患者がやって来る。

数年前から高倉氏は「総合ミネラルによって、農薬などの残留毒が減らせる」と実験を続けた結果、ドリン、DDT、カドミウムなどが吸着されることをつかん

だ。

しかも、温泉療法で知られるように、ミネラルは体内の汚染物質も吸着し、排出することを知った。人体用ミネラルを取り入れることは、人体の健康を維持するだけでなく、もっと積極的な働きをするのである。したがって、総合ミネラルを汚染土壌に連続的に取り入れることで、土壌は死滅することなく、復活することすらできるのだ。高倉氏は「警告」だけでなく、絶えず対策の「可能性」を追究する大衆の中の学者である。

だから高倉氏は「自然食」「正常食」にも堂々と発言する。

「自然食は、必然的に生産量が少なくなる。少ないから高く売れる。高く売れるからつくる。が、全国民に行き渡らせることはできない。特定少数者の農業でなく、不特定多数の人々のことを考えなくてはいけない。一人でも多くの同胞を救うのです。減反など最も下手な農政でした。自給自足がいかに大切か、私はそれを国民に知らせたい」

石たたす 少なな神のみわさもていたつく民を 救えとぞ思う
高倉氏が満州へ出発するとき、親しい万葉学者が詠んでくれた。
高倉瀧景博士は日本と日本人をいつまでも忘れない。

柳原政史